

研究紀要第20号発刊に当たって

副学長 木村和夫

本学園は、平成14年に創立100周年を迎えました。これも明治35年創立以来、偏に諸先輩の不断の努力と、関係の皆様方のご支援とご協力の賜物と思っています。

その歴史の歩みの中にあつて、昭和58年4月地域の期待を担つて、幼児教育科と秘書科の2学科を擁する女子高等教育機関として豊橋短期大学を創設いたしました。

また平成3年には男女共学の経営情報学科を増設し3学科体制となり、キャンパスは男子学生も加わつて大変賑やかになりました。

時代の流れは四年制大学への進学率の上昇をもたらし、本学も平成8年経営情報学科を学部へ改組し、大学名を豊橋創造大学と致しました。

これに呼応して同年豊橋短期大学も、豊橋創造大学短期大学部と改称し、同9年には、秘書科を実務教育科と改め今日に致つています。また、平成14年には短期大学部に専攻科福祉専攻を設置することによつて、時代の要請に極力対応致していることはご承知の通りであります。

本年（平成15年）は、短期大学創立20周年の記念すべき年を迎えます。この時に当たつて、「研究紀要」も第20号の号数を重ねることとなりました。顧みますと創刊号は豊橋短期大学がうぶ声を上げた昭和58年度の末に発刊されています。

初代学長 榊原康男先生の巻頭言によりますと「研究紀要」は初年度から刊行すべし、という当時の先生方の強い意気込みがあつたと記されています。12名の先生方の所載論文は学科構成や規模からいつて専門分野は色々ですが、内容豊かな力作ばかりでありました。

大学は教育と研究の場です。新しい研究の成果がより良い教育の基礎でもあります。

本学のスタッフがどのような研究領域や問題意識をもっているかは、今までの研究紀要をご覧頂ければご理解頂けるものと思ひます。大学教員は、研究者であり、かつ教育者であるわけですが、大学進学率の上昇にともない、大学の大衆化も顕著になりました。従来は研究に軸足を置いていれば良かった先生方にも、入学してくる学生の質の変化に対応する教育力が強く求められる時代となつてきました。従つて教育内容や教育方法等の課題を意識しながら纏められた論文も掲載されるようになったのも時代の流れでしょうか。

先生方が、研究者・教育者として、自身の研究課題に静思し、真剣に取り組むことは、多く孤独な過程への苦しい挑戦であるといえます。その苦しさを通してこそ、学生に対して自信と誇りをもつて指導を行なうことが出来るものと思ひます。

「豊橋創造大学短期大学部研究紀要」は、本大学の教員の研究成果を発表する機関誌でありますと同時に、各種公開講座などの内容を記録し公表する冊子でもあります。

二学科のみの短期大学ですが、それぞれ教員が自由に研究成果を発表し、広く学会、教育界そして一般社会に問うていくことは、大変意義あることであります。

紀要は大学の遺産とまで言われます。研究紀要編集委員会の委員の皆様の真摯かつ献身的な努力と諸先生方のご協力によって、ここに記念すべき第20号を刊行することが出来ますことをともに喜びたいと思います。紀要が核となって、個性あるキラリと輝く学園造りに寄与することを心から願っています。また本紀要をお読み頂く皆様方の忌憚のないご叱正を今後も頂ければ幸いです。

最後になりましたが、20号発刊を記念して、鈴木安昭学長自らも特別寄稿いただきました。従って巻頭言を学長に代わって執筆するようご指示があり駄文を呈しました。ご海容下さい。